

仏教が現代に寄与できること(第五〇回光華講座)

著者	徳永 一道
雑誌名	真宗文化 : 真宗文化研究所年報
巻	26
ページ	97-128
発行年	2017-03-01
URL	http://id.nii.ac.jp/1108/00000828/

第五〇回 光華講座

仏教が現代に寄与できること

浄土真宗本願寺派勸学・京都女子大学名誉教授

徳 永 一 道

一

みなさん、こんにちは。初めてこの大学に寄せていただきましたが、先ほどご紹介いただいたように、私は京都女子大学で三十三年間も教員をしておりましたので、女子大というところにはたいへん親しみがあるのです。またこれは私のいちばん大切な経験にもなっています。女子大生を対象に仏教あるいは浄土真宗の教えを講義として伝えておりましたことが、私のいちばん大きな精神的財産になっていることは間違いありません。

こちらの大谷派の方は知りませんが、一般に仏教ひいては浄土真宗の教えは実に独特な、かつ難しい言葉を使って表現されることが多いですね。学問としては従来は江戸時代の宗学用語をそのままに、また近年は西洋哲学の概念や用語を用いて仏教思想ひいては親鸞思想を表現するのが普通になっていますが、はたしてそれなくして

浄土真宗は語れないのかというのが私の忌憚らない思いであります。極端に言えば、一般の人たちにとっては、火星人がしゃべっているような言葉しか使っていないということがしばしばあります。

私は長年京都女子大学で学生たちを対象に講義していて、そういう風潮を何とか打破しなければならぬということを痛感したわけです。仏教ひいては浄土真宗の教えは従来のような特殊なことは、特殊な概念だけを用いていては一般の人たちに伝えることができないということは、私が長年の間女子大生を対象にして教えてきた経験から得た信念のようなもので、またそれを克服することが念願でもあります。

こういう思いは女子大学での経験に加えて、仏典英訳という作業から得られたことでもあります。うちの宗門に本願寺国際センターという機関があつて、ここでは、英語とポルトガル語しかありません。聖典の翻訳という仕事をしているのです。私は今まで四十三年の間、そこで浄土真宗聖典の英訳の作業をしています。今は勸学寮というところに身を置いています。けれどもこの国際センターで聖典の英訳の仕事をしているわけです。浄土真宗の聖教を翻訳するのですが、そこから学んだことは非常に大きいものがあります。

日本の仏教ひいては浄土真宗の人たちはだいたいにおいて視野が狭いんですね。大谷派も似たようなものだと思いますが、うちの方は特にそうだといわざるをえません。

「『こういう有難い教えが外国人にわかるんですか？』」

「『浄土真宗のお聖教が英語になんかなるんですか？』」

というような質問が今でも平気でなされます。そういう質問に対して、

「浄土真宗の根本聖典の『大無量寿経』の原典はサンスクリットというインドの言葉ですよ」

というような対応をしなければならぬのですが、それだけで通じることはまずありませんね。

二

仏教はその発祥の地であるインドから各地を経て日本に伝えられてきたのですが、それが経典の翻訳によってであるということはあまり言われることがない。けれどもこれは否定できない事実でしょう。

ただし、聖典の翻訳には、当然のことながら、いくつもの大きな制約があります。まず翻訳というのは原本から離れるわけにはいきませんね。したがってもとの用語や概念が訳されるべき言語にない場合、言うまでもなくほとんどがそうなのですが、それに近い言葉を用いたり、場合によっては作ったりしなければならぬので、読む人がその翻訳を通じてただちに理解できるというようなことはまずありません。いくら工夫して翻訳をしても、それを読んでただちに理解してもらえないなどというようなことはありえない。『歎異抄』のようにポピュラーな聖典の英訳は数多く出されていますが、それぞれの訳が微妙に違いますし、時には大きく違うことがあります。まして、他の浄土真宗の聖教を一生懸命に英語に翻訳したところで、それがただちに理解してもらえるなどということはありません。

翻訳に限らず、仏教思想というものはそれを的確に伝える人が必要なのであって、その人を通して原語や原文の意味がわかるということは言うまでもないでしょう。仏教の教え、浄土真宗の教えを伝えるということのため

に翻訳聖典があるのであって、その逆ではありません。私の経験から申しますと、いつも苦勞するのは「どういふふうに伝えるか」ということです。私がやってきたのは聖典英訳の作業ですが、もともと英語には仏教用語など一語もないのは言うまでもないことです。ごくわずかながらサンスクリットの単語が英語になってしまっているのはあります。ブッダとかニルヴァーナとかサンサーラ（輪廻）などという言葉はもう英語になってしまっていて、だいたいの意味までみんな知っているので、英語として用いてもいいのですが、浄土真宗の用語がそのまま英語になるということはまずありえないのです。もの考え方が大きく違うので、その考え方の違いから説明していかないといけないということになります。

それで今日は、仏教独自の概念や用語から入っていかずに、一般にわれわれが日常的に使っている日本語（仏教語も入ります）と英語の違いをみなさん方にご紹介して、そこから仏教の思想をご理解いただきたいと思えます。日本語の日常表現の中に英語では用いられていない言葉や概念が数多くありますが、それらはわれわれ日本人がずっと保持し続けてきた心情や価値観、しかも外国には見られない心情・価値観であることが非常に多いのです。

まず、みなさんにお渡ししてある資料の1番目を見てください。

「英語（西洋語）に翻訳できない仏教語↑↓訳すことができないということは、そういうものの考え方、ひいてはそういう人間観・世界観が英語世界にはないということである。」

と書いてありますね。これは注意しないとイケません。どんな言葉も英語に訳してしまえるということはありません。

ません。私に言わせれば、英語に訳してそのまま通じる言葉はごく数えるほどしかないと言ってもいいでしょう。それはものの考え方の根本が違うからです。

例えば「向こうに山が見える」というごく日常的な日本語ですが、これは英語にはできません。ここに書きました「I see the mountain in the distance.」は中学一年生で習うような易しい英語ですが、これは「向こうに山が見える」とはまったく違うんですね。翻訳の機械ではこれが出てくることはまず間違いないでしょうし、一般にはこの英語訳で済ませてしまいます。ところが、そういう英語の勉強の仕方ではまったくダメなのです。みなさんの中には翻訳機をお持ちの方もおられるでしょうが、あれはよくない。生きた言語の命を根こそぎ奪い取ってしまうのが翻訳機械だと思います。

「向こうに山が見える」は、この「I see the mountain in the distance.」という英語ではありません。どかが違うんですか。そもそもこの日本語には「*ッ*」がないでしょう。「向こうに山が見える」は「私は、向こうの山を見えています」ではありませんね。いったいこの文章の主語は何でしょうか？

実はこの文章の主語は「山」でしょうか。「山」が「見えている」、だから「山」が主語であることは明らかなのに、見ているのは「私」だという状況が表現されている。これにはみなさん驚かれませんか？ 文法的に言えば主語は「山」でしょう。「山が見える」んですからね。でも、見ているのは「私」です。この構造には実に深いものがあります。はつきり言わせて「他力」というのはこういうことなんです。他力的な発想でしか、こういう表現は出てきません。つまり、山が先にあつてそれが私の眼に映じているという状況をこの日本語は表現しているのでしょうか。

「小鳥の音が聞こえる」というのも同じで、この場合の主語は「小鳥の声」でしょう。「私が、小鳥の声を聞いて

ている」という文章ではありませんね。普通、われわれ日本人は「私は、小鳥の声を聞く」とは言いません。つまり、「小鳥の声」が主語、「山」が主語なんですね。そういうことは英語では表現できません。だから、説明しなければいけないわけです。

今あげた二つの表現は文章としての例ですけれども、もつと簡単に単語だけの例をあげたら、例えば「遠慮」という言葉は英語にはありません。和英の辞書を引いたら「*hesitation*」というような対訳語が書いてありますが、これは「ためらい」という意味ですね。悪く言えば優柔不断ということです。ところが「遠慮」はそうじゃないでしょう？「遠慮」というのは日本語では美德でしょう？とところが「*hesitation*」は決してそうじゃない。

それではなぜ「遠慮」という言葉が英語にはないのか。それは向こうの人は遠慮をしないからです。だから、「遠慮」という言葉は要らないのです。例えば、誰かに招待されて、「コーヒーとお茶のどちらにしましょうか？」とか言われたとき、日本人はまず「いやいや、けっこうです」などとまず言って、さらにすすめられると「どちらでもけっこうです」と答えることが多いでしょう。これは遠慮しているわけです。そちらさまの出しやすい方を出してください、という意味ですね。

でも、向こうの人は「どちらでもけっこうですじゃ、わからんじゃないか」と言って、悪くするとしまいにはケンカになるかもしれません。向こうでははっきりと意思表示をしないといけないのです。「お茶とコーヒーのどちらにするか？」と訊かれたら、はっきりと「お茶をください」とか「コーヒーをください」と言わなければいけないでしょう。つまり発想が違うということなのです。

もう一つ例を挙げると、日本語の「さようなら」は「Good bye」ではありません。どちらも同じ別れの言葉ではありませんが、「Good bye」の原意は「神様と一緒に行きなさい」ということです。「さようなら」はそういう意

味じゃありませんね。

同じように、「有難う」は決して“Thank you.”ではありません。両者はまったく違います。「有難う」は漢字をお読みになったらわかるように、「有ることが難しい」、「有ることが難しい」、つまり「滅多にない」、という意味です。「あなたが私にしてくださいださったご親切、あるいは、あなたが私にくださったものは、そのへんにさらにあるような、そのへんに転がっているような安っぽいものではない」という意味で、したがってそれが感謝の言葉になるわけです。ところが、“Thank you.”は、私はあなたに感謝しますという意味であって、その奥には「私」というのが隠されているのです。

そういうことで、われわれの日常の日本語がすでに仏教精神を表現しているのです。「有難う」などという言葉は仏教のものじゃない、などと思いがちですけれども、そうではなくて、われわれが日常に用いている言葉に仏教精神が流れている。というような見方から始めていかないと、仏教が日常からかけ離れたやたらと難しいものになってしまうと私は思うのです。

三

今ここで例に挙げたような日本語は、いずれも、いわゆる「主語」をもたないという文章例であります。これが日本語の特徴、つまり日本人の発想の独自性であり、また特徴でもあって、これは仏教においてもまったく同じことだと言っても差し支えはないでしょう。

ところが、西洋人は、まず主語を明らかにして、主語を中心に発想し、ついでそれを言葉で表現して、はじめ

世界が展開していきます。私がハーバード大学にいる時に、ゴードン・カウフマンという有名なキリスト教神学の教授の講義が非常におもしろかったので、時間がある限り聴講していたんですが、ある時、彼が講義の始めに、「英語を話す国民（English-speaking people）」つまりアメリカ人とかイギリス人は、三歳ぐらいになったら、「ジー」という言葉を使い始める」と言い、「その時、その子どもに自我が生まれるんだ」という話をしていました。キリスト教神学といっても、カウフマンはこんな話ばかりで、非常におもしろかったです。そして、彼はそこに座っている私に目をとめて、「あ、ここに日本人がいる」といって、「日本語ではどうだ」と質問したので、いきなりそんなことを訊かれたので、私はいへん困りました。

日本人の子どもはいつから「わたし」や「ぼく」という言葉を使い始めるんだという質問で、私はとっさには返事ができなかつたのです。それで「ちょっと待ってください。一週間、次の時間までに用意をしておくから」と言っ、一週間のあいだそれについて考えました。そして、一週間後にその講義に行ったら、みんな私の返事を待ちかまえているんですね。そこで、私がどういふ答えをしたかというところ、

「よく考えてみたけど、一般に日本人の子どもは「ジー」という言葉を使わない」

と、こう言っただけです。「例えば、ケンという名前の子がいたとしよう（ケンという名前はアメリカにもあるの、一番通用しやすい）。その子は自分のことをどう表現するかというと、「ケンちゃん」と言うんだ」と。そうですね。自分のことを、「ケンちゃんね」と言います。三歳の子が自分のことを「ぼくはね」とは言いませんね。さて、カウフマンが「それはどういう意味か」と言うので、「その子は家族の中では「ケンちゃん」と呼ばれている、その呼び名のことだ」、つまり「家族の中で位置づけられた自分を指すのであって、そういう言葉をもちいて自分というものを表現しているのだ」と答えたことがあります。

ところが「I」という言葉は、それ以外の存在をいっさい切り捨てた「私」でしょうね。したがって、「I」と「ケンちゃん」にはそれぐらい大きな違いがあるということです。翻訳の機械ではこの両者はただちに同一の概念として扱われてしまいます。ですから、翻訳の機械ではダメですよ。こういうものは何の役にも立たないのです。もともとこの二つの言語においては、それを用いる人の発想が違うんだから、つまりものの考え方が違うんだから、直ちに置き換えることなどできるわけがないのです。外国語を学ぶということは、そういうことを学ぶということ、それがないと意味がない。機械的に置き換えていったところで、何の意味もありません。それで私はこの頃は翻訳の機械はよくない、どこか非常に苦々しいと言いつつ続けているのです。二つの言語の背景にあるものがすべて犠牲にされて、上っ面の意味だけしか伝えることしかできないので、きわめて薄っぺらいものになってしまのです。

話をもとに戻しますと、「I」という主語がないわけですから、それは日本人は「自分」を表に出さないということです。現代日本語の「私」という言葉は、司馬遼太郎さんの話では、明治のずっと後になって出てきた言葉で、もともと日本人は「I」に相当する言葉を使わなかったのです。映画などで侍がよく「拙者」なんて言いますけれども、あれだつて厳密には「I」（「私」）という意味ではないでしょう。その状況の中で単に自分を位置づける言葉だと思えます。映画ではそういう使い方はしますけれども、あらゆるものを差し置いて「I」を主張するような表現ではないし、またもともとそういう発想は持たなかったということではないでしょうか。それが日本人のものの考え方のいちばん大事なところで、これには仏教の影響が大きいと思います。

さて、二番目の「衆生」という概念ですが、これは、「もろもろの生あるもの、生きとし生けるもの」という意味です。

諸天・人民、蠕動ねんどうの類、みな慈恩を蒙こうむりて憂苦うらくを解脱す。

という文章は、浄土真宗の根本聖典である『仏説無量寿経』という経典に見られる表現です。諸天は天人、人民は人間、そしてここではそれで終わりじゃありません。つまり阿弥陀仏の大悲のはたらく対象は「諸天・人民」だけではなくて、蠕動の類にまで及んでいるということです。「蠕動の類」というのは「うじ虫」のような、地面をクネクネと体をくねらせて這っているような虫のことです。

「無量寿経」ではこの蠕動の前に、「蜻飛けんぴ」という言葉がつかくともあります。蜻飛は、ぴよんぴよん飛び跳ねているバッタとか、トンボとか、そういう虫のことです。阿弥陀さまのお慈悲は、人間だけじゃなしに、トンボやバッタ、うじ虫にまで及んでいるということになります。仏陀の大悲からすれば、人間もうじ虫も同じ範疇に入れられているということです。すごい考え方、すごい世界観だと思いませんか？

ついでながら、これに対してキリスト教では、有名な旧約聖書『創世記』の「神の世界創造」のところにはこう書いてあります。

神は自分のかたちに人を創造された。すなわち、神のかたちに創造し、男と女とに創造された。神は彼らを祝福して言われた、「生めよ、ふえよ、地に満ちよ、地を従わせよ。また海の魚と、空の鳥と、地に動くすべての生き物とを治めよ。

とあるように、神様が人間に向かって「動物やその他のものを全て支配下に置け」と命じられたということだ

す。聖書の別のところには、「このけものたちを食糧とし」と書いてあります。つまり、人間は「万物の霊長」つまり人間は特別な存在で、自然界にあるものを自らの支配下に置き、それらを利用すべき存在であるという考え方です。ですから、英語世界に「衆生」という概念はありません。

それに比べて『無量寿経』に説かれる阿弥陀仏の本願では、人間もトンボもバッタも、ひいてはうじ虫にいたるまでみな同じだということで、その「衆生」という言葉を、一応は英語に訳しますが、その内容を理解してもらおうのは並大抵のことではありません。

このように、普通のごくありふれた言葉でも、なかなか翻訳できないということが多いのです。その違いを強調して、アメリカ人やヨーロッパ人に伝えていくというのが、現在の仏教の大切な仕事になっているのであって、いきなり高尚な救済思想をバーンとぶつけて、「どうだ、有難いだろう」といつてもまったく伝わってはいないのです。つまり日常の発想が全然違うわけです。そしてその違いは仏教的発想から来ているんだというような導き方で話していかないと伝わりません。

ややもすると、仏教徒には「こんな立派な深い教えはないんだぞ」という意識が非常に強くなる場合がありますが、それでは仏教的発想を押しつけてしまうことになりかねません。けれども、みなさん、よく承知していただきたいことは、世界の宗教の中で、残念ながら日本の仏教徒は1%ぐらいしかいないということです。

にもかかわらず、思い上がっているというか、日本の仏教徒には「西洋人ごときにこんな深遠な思想が分かるはずがない」という人も多いのです。だいたい前の経験ですが、私が聖教を英語に翻訳しているということを耳にされた浄土真宗の偉い学者さんから、「あなた、お聖教を英語に翻訳しているそうだけど」と言われて、「そうです」というと、「外道に浄土真宗の教えがわかるのか」って言われたことがあります。だいたい「外道」とい

う言葉はこれはひどい差別語ですよ。こういうことを平気で口にするような人が浄土真宗の中にはいるわけです。これではもうどうにもならないですね。

われわれが仏教の教えがいかに深いと思つていても、それが伝わるかどうかということが問題なんです。伝わらなかつたら何もならないのです。それには日常的に用いている言葉の、ひいては発想の元が違うということから入つていかないといけないわけです。それをとばしていきなり深いかつ高等な教えを押しつけても、相手にとつては何のことかわからない、ちんぷんかんぷんなのです。

今問題にしている「衆生」という概念を、いちおうは一定の言葉で訳しますけれども、その意味は正確には伝わっていないことになります。

四

次に、今日私が用意してきた、いくつか代表的な言葉を挙げて、みなさんにおわかりいただきたいと思えます。「日常語になつた仏教の価値観」です。なかでも私がいちばん大事にしているのは「ご縁」という言葉です。みなさん方はこれは普通の日本語だと思いでしょね。何の不思議もなく抵抗もなしに用いますね。だけど、実はこれは英語には訳せないのです。つまり、英語を話す人たちはこういう発想をもたないということです。

西洋では自分の意志で人生を切り開いていくという発想が基本的なものですから、「私が置かれた状況のおかげ、私が関係する人たちのおかげ」という「ご縁」という発想は一般には見られないのです。「ご縁」は私の意志は二の次だということで、自分の意志は表にでていません。

例えば、今日、みなさん方と私がこういうふうにお会いできていることは、「ご縁」としか言いようがないのではないのでしょうか？。私がどれほど強い意志や願望をもって努力をしたところで、こういう機会を自分では作れるわけはありません。しかも一度できたご縁は死ぬまで消えないのです。つまりわれわれの人生はご縁の連続でできあがっているということで、これは間違いなく仏教からくる発想です。

皆さんにお渡ししてあるハンドアウトに、「釈尊の正覚の内容は縁起（因縁生起）である」と書いてあります。ご承知のように釈尊の正覚（さとり）の内容は「縁起」であります。したがって、仏教の真理は全て縁起に由来しています。仏教の究極的な真理は、いろんな表現が用いられていますけれども、行き着くところは縁起だということになります。

つまり、あらゆるものが、時間的・空間的に関係し合って成立しているということで、例えば、私が今なぜここに立ってみなさんにお話しているか説明しなさい、と言われてもできないのです。それは一郷先生に招かれたからだ、というのでは説明になりません。まず私がいなければ、あるいは一郷先生がいなければ、という前提が必要となります。それをさかのぼって考えると、どうして私がこの世に生を受けたかという命題になります。それをさらに問うと、なんで私の両親が結婚したのか、その前になんで両親が出遇ったのか、さらになんで両親が生まれたのかという問いになり、これはついには空間的には世界の果てまで、時間的には歴史の始まりまでさかのぼる、というような問題にならざるを得ません。人生はそういうことで成立しているのであって、それ故にわれわれ日本人はあらゆる出来事を「ご縁」として扱ってきたのです。

これが、日本人の非常にすぐれた、また美しい人生観です。結婚のことを縁談と言いますね。「ご縁」によってできた話だから縁談というのです。一人の男性と一人の女性が知り合って夫婦になる、これはちよつとやそつ

とでは説明できない出来事です。今はそんなことは抜きにして「愛だ、愛だ」と言いますが、でも、「愛」なんでものは「ご縁」に比べたらけし飛ぶほど軽いものでしょう。もともと、「ご縁」は、われわれの人生、存在の根本にかかわっている原理であります。そしてこの「ご縁」は英語には翻訳できない言葉なのです。

ハーバードでの最初の講義で、学生は三〇人に制限されていましたが、「私は君たちを知らない。事務所で、今日はこの教室で講義をしると言われて来た。これから覚えていくけれども、君たちの名前を知らない。君たちも僕を知らない。講義のプログラムを見て、やって来たら僕がここにいた。お互いに知らないもの同士が初めてここで対面する。こういうのを日本語で『go to』と言った。」私はそこから始めたんです。「ご縁というのは、こうこうこういう意味であって、人生というのはご縁で成立している。今日も貴重なご縁である。私と君たちとの対面が成立した。お互いにこのご縁を大切にしようじゃないか。」ここまで説明したらみんな分かります。一時、『go』という発音は難しいんですけど、英語に翻訳できないので、そのまま日本語で通すしかないんです。一時、私の身近な学生たちの共通の言葉になりました。私の顔を見たら『Hi, go-on!』って、しばらくの間、私のニックネームは『go-on』になりました。そういう発想、ものの考え方を知らなかった人たちが、ちゃんと理解できたわけです。

仏教は、はるか昔からそういうふうにして、人間関係を含む世界、あるいは人生をとらえています。そういうことを、われわれ現代の日本人は忘れてしまっているんじゃないかと思います。これは非常に貴重な考え方であって、的確な説明さえすれば、西洋人もちゃんと理解してくれるということです。それなのに、われわれはそれを忘れてしまって、自分の意志と努力で切り開くのが人生だということを、第一に考えてしまいますけれども、現実には「ご縁」がなければ何事も成立しないのではありませんか。私がこの世に存在したことも「ご縁」で

すね。それ以外にありません。「私は自分の意志で生まれてきました」なんて言える人はいませんね。

言うまでもなく「ご縁」は釈尊のさとの内容である「縁起」からくるのですが、親鸞聖人の場合、「縁起」という言葉はお使いになりません。ただし「縁」という概念は用いておられます。ハンドアウトに挙げておきました、親鸞聖人の『教行信証』の序文、「総序」と申しますが、そこに「ああ、弘誓の強縁」という言葉が使われています。「強縁」というのは、阿弥陀さまの本願のはたらきとしての強力な「ご縁」のことです。

この「強縁」の「強」は「弱」に対する言葉ではなくて、「絶対的な」という意味です。私どもの英訳ではこれを *decisive* つまり「決定的な」と訳しました。私を真実に目覚めさせてくれたのは、たった一つの、つまり決定的な阿弥陀さまのはたらきだけだ、という思いから親鸞聖人はこの表現を用いておられる、つまり本願のご縁のみによって、私が真実に目覚めたんだということを、ここに喜んでおられるということでしょう。

それは「遠く宿縁を慶べ」という言葉にも表れています。つまり、はるかな過去から連綿と続いてきたご縁が、今、ここに私の上で稔ったんだということをおっしゃっているわけです。

それから、先ほど言いましたが、「有難い」という言葉です。「Thank you.」じゃありませんよ。「Thank you.」は「私はあなたに感謝します」という意味ですから全然違います。あなたが私に施してくださいました親切は、めったにない、有ることが難しい、そのへんに転がっているものじゃない、という意味になるんです。これには「私」がないでしょう。「Thank you.」には「I」という主語が隠されていますが、「有難い」ということには「私」はどこにもありません。

五

私が今日みなさん方にいちばんわかっていただかと思つて用意してきたのが「もったいない」という言葉です。ご存じの方も多いと思いますが、ワングリ・マータイさん、ケニアの女性の大臣で、残念ながらもう癌で亡くなられましたけど、環境保護運動をしていた方です。この人が日本に来て、たまたま「もったいない」という言葉を教えられ、非常に感動したそうです。特に自然界に対してもつべき人間の姿勢を表現する言葉として、これ以上のものはないと思うに至ったのですが、ところがこの「もったいない」という言葉は英語に翻訳できないんです。

翻訳できないけれども、その意味を知ったら、実に大事なことだということでこのマータイさんは「MOTTAINAI」運動を始めたのです。今の東京都知事の小池百合子さんが強力にサポートをしていました。だから、私は小池百合子さんが大好きです（笑い）。あの人は意志が強い人ですね。現在真剣に原発廃止を提唱している元首相の小泉純一郎氏もこの運動に共鳴した人です。今の政治家にはなかなかこんな理念をもった人はいませんね。みなさん方も、「もったいない」という言葉はお使いになるわけですけど、これはいったいどういう意味ですか。難しいですね。和英辞典を引くと、ふつう *wasteful, wasting, too good* などという訳語が当てられますけれども、違いますね。 *wasteful* は、無駄が多いという意味でしょう。 *wasting* も同じような意味であるし、 *too good* は、良すぎるといふ意味ですね。ところが「もったいない」といふ言葉はそういう意味ではないのではありませんか。これはどうにも言葉で表現しにくい概念ですね。

「もったい(勿体)」というのはもともと仏教語ですが、私はあらゆる辞書を調べましたけど、「もったいない」という表現は仏教の辞典には出てきません。「勿体」は、そのものの自性ということですね。そのものが有している固有の価値、それを無駄にしている、ということが「もったいない」の意味ではないか。私の理解ではそうなります。これは、どんな西洋語にも翻訳できません。だけど、これは非常に深い意味をもっていますが、客観的に説明することはきわめて難しい。

「もったいない」には「私」という隠れた主語はありません。「私が大事にしている」「私が保護している」というような意味は一切ありませんね。これは「私」が価値判断をする以前の、そのものの自体の価値を表現している言葉であるとしか言いようがないのです。この点は今まで挙げた日本語と同じですね。「私」を表に出さない、あるいは中心に置かない。「もったいない」は、ものそのものの価値を言っているものであって、ワンガリ・マータイさんは、それこそが現代において最も必要な姿勢だと、特に自然保護ということに関してこの言葉を使いました。

あるいはもつと日常的なことに適用しますと、現代においてはわれわれは贅沢ばかり、無駄ばかりすることが人生の権利だと思ってしまうようになっていきますけれども、それではダメだという警告のことばにもなるでしょう。マータイさんは、国連の女性地位向上委員会で、出席者全員といっしょに「MOTTAINAI」と唱和することを提唱されました。これは私もニュースで見ただけがあります。「MOTTAINAI」をその会議の一番中心のテーマにして、出席者全員に唱えさせたのです。

それは、現代のわれわれの文明に対する、彼女の痛烈な批判です。われわれは地球の資源を食いつぶし、先端の技術を駆使していかに自分の物質的欲望を満足させるか、そのことばかりに夢中になっている。これでは地球

がダメになるじゃないかということ、彼女は提唱したんです。まったくその通りだと思っています。

私の宗門では、前門主は原発に対して非常に強い反対の意志を表明しています。私どもも、もちろんそれに同調しています。前門主だからということではありません。おっしゃることに一貫した筋が通っているからです。原子力発電で安上がりの電気が手に入り、その電力によってわれわれの生活は豊かになります。だけど、原発の核燃料は処理できません。核廃棄物は十万年かかっても処理できない。すると、原子力発電をすればするほど、われわれの子孫に対して処理できない「負のおみやげ」を残すことになるのです。「そういうことは自分には耐え難い」というのが、このお方の信念というか、提言なのです。もう、これ以上の贅沢をやめようじゃないか。便利で豊かな生活をちよつとストップしようじゃないか。そうすれば原子力発電に対する考え方も変わるだろうということ。それを前門主は言い続けてこられました。

私もまったく同じ思いで、この提唱に賛成しています。これは、もうこれ以上便利にならなくていい。これ以上豊かにならなくてもいい。だから、もう少し、地球の将来、人類の将来を考えてみようじゃないか、という発想から生まれたことです。電力によって資源を食い荒らしていくことは、「もつたない」ではないかということ。とです。

このワンガリ・マータイ女史の「MOTTAINAI」運動に同調したのがマリナ・シルバさんです。ブラジルの環境保護運動家で、元はブラジルの環境大臣を務めた人ですが、アマゾンの破壊を五八％阻止した人です。アマゾンには広大な原始林ですけど、それが人間の欲望のためにどんどん破壊されていっているのです。それを、五八％阻止したということで評価されている人ですが、その彼女の信念の原動力になったのが「MOTTAINAI」精神です。「自分はケニアのワンガリ・マータイさんの後継者である」と言っています。この人は健在ですから頼りにな

りますね。

六

こういう運動をなぜわれわれ日本人がしないのか。われわれは豊かで便利な生活が先進国の証しであると酔いしれていますけれども、はたしてそれが「もったいない」という、日本人が大切にしてきた精神に抵触しないのか、考え直さないといけないのではないのでしょうか。今では「もったいない」という言葉さえ知らない子どもも多いのです。大人でも、言葉だけは知っていますけれども、その真の意味は知らないでしょう。「無駄だ」ぐらいにしか思っていないのではないですか。「MOTTAINAI」は、翻訳できないからそのまま世界共通語にされてしまったというこの事実を、われわれ日本人が真剣に考え直すべきじゃないでしょうか。

以上に取り上げた「ご縁」「有難い」「勿体ない」という言葉は、明らかに仏教語でありまして、そういう精神が、人生の意味づけのみならず、世界のありようを批判していく大きなキーワードになるのに、なぜ、われわれ仏教徒ははたらきかけないのかということになります。だいたいにおいて、仏教徒はうちに閉じこもってばかりいて、外に向かつてものを言わないんですね。

私がいへん尊敬している人に、アルフレッド・ブルームという、ニューヨーク出身のハワイ大学の元教授がいます。キリスト教の神父さんだったのに、親鸞聖人の教えに共鳴して改宗して本願寺で得度までしてしまった人です。学者でもあり、妙好人でもある人ですが、この人はずっと「なぜ、仏教徒は外に向かつて発信しないのか」と言い続けています。私の悟りがどうのこの、救いはどうのこの、そんなことばかりやっている、と

彼は批判しています。今は老齢のためにできないのですが、ずっとインターネットで浄土真宗の教えについて発信していました。この人の影響で浄土真宗の教えの扉を叩いてきた人はいっぱいいます。

私もそのおかげと云いますか、そのせいで、見知らぬ人から「教えてくれ」とよくメールが来ます。ブルームが私のことを書いていたんですね。このブルームさんは、「仏教徒は、なぜ自分のもっている、他には見られない世界観とか人生観の価値を外に向かって発信しないのか」と言っています。要するにわれわれには社会性が無いということです。私は今の立場になってから、「浄土真宗の社会性」を言い続けてるんですが、私の宗門に限って言えば、現実には非常に抵抗が強いのです。「社会性などは浄土真宗の教えには関係がない」というのです。

浄土真宗の教えは。「私と阿弥陀さま」との一对一の関係である、この私がいかにすれば救われるかという問題なんだ、と私を批判する人は言うのです。このように社会性を言わないから倫理性も出てこない。ところが、「浄土真宗の救いは倫理じゃない」と、まるでオウムのように繰り返し言っています。だとあの有名な「善人なおもて往生をとぐ、いわんや悪人をや」という『歎異抄』の言葉は、「善悪」という倫理的価値を前提として用いられたことではないのですか。阿弥陀さまによる救いは倫理を超えているという教えは、倫理を前提としなければ出てこないのではないのでしょうか。

ブルームが言っているのは、「浄土真宗の教えが、現代という時代に生きるわれわれ全体にとって意味があるということ、浄土真宗はなぜ伝えないのか」ということです。私と阿弥陀さまの関係ばかりを問題にして、隣の人、よその人は関係ない、というようなことでもいいのかということですが。

七

どこかに書きましたが、私の尊敬する先輩の布教使さんが、ある時、大阪の私どもの別院（津村別院）で法話をされたのですが、その時に一人の同行が、お礼を言いに来られたんです。「今のお話ありがとうございます」と。とまず礼を述べて、次いで「私はこの講座を一度も欠かしたことはありません。」と誇らしげに言ったそうです。先輩が「それは結構ですが、お仕事は何をなさっているんですか」と訊いたら、それに答えてくれたので、「それはお忙しいでしょうね。それなのにご家族をよくあなたを聴聞に行かせてくださいますね。ご家族の方は偉いですね」とご家族を誉めたのです。するとその同行は「いえ、うちの家族はみなフツウの人間ばかりです」と言ったそうです。この人は「偉いのは私だ」と言っているのです。「仕事が忙しいのに、聴聞だけは一度も欠かしたことがない、だから私が一番偉いんだ」と。

こういうふうには話を聴くという姿勢はどうなんでしょうか？これは自己満足をしているだけなのではないのでしょうか？「こういう傾向が続いてきたんじゃないんですか」と、私はうちの宗門の法座でいつも言っています。戒めているわけです。隣の人は関係ない、家族さえ関係ない、私と阿弥陀さまとの一对一の関係が浄土真宗の救いの問題だと、こればかり伝えてきたのです。それでいいんだろうか。それで大乘仏教と言えるんだろうか。大乘は大きな乗り物という意味です。誰でも乗れる。私だけが乗れるんじゃないですよ。私に言わせれば、大谷派もうちも同じです。明治以後の浄土真宗は、この考え方はすっかりに明け暮れてきたんです。横の人に目を向けようとしないうえ、家族にさえ目を向けようとしなかつたんです。それが大乘だろうか。他者の救いは阿弥陀さ

まにまかせておけばいいんだろうか、ということです。私は、そういうような疑問を近年になってもち始めて、さかんに言うんですけど、現実はなかなか抵抗が強いというほかはありません。

浄土真宗の法義に対するこういう姿勢は、「安心あんじん(信心のことです)は一人一人のしのぎの問題である」という考え方からくるのです。われわれは頑かたくなにそういう姿勢を守ってきたし、また強調してきたのです。第二次世界大戦後には、盛んに実存哲学というものを用いて、親鸞聖人の教えを理解しようとするものがしばらく続きました。そこにはいっさい社会性というものが無い。教えはひとえに「私の実存の問題だ」と。こういう傾向では、教えの客観性・普遍性・公共性というものが出る幕がない、しかも教えがどこへ行ってしまうかわからない、というのが私がつねづねもっている危機意識です。これを何とか打破しないとけません。

話を元に戻しますと、今まで挙げてきました例は、非常に一般的な用例で、日常語になった仏教語です。われわれ日本人は、日常において仏教的発想を用いていたわけで、それが日本人の精神性の大きな柱になってきました。それが失われようとしている現代で、仏教徒はそれを取り戻すように努めなければいけないと思います。

私が長年の間勤務した京都女子大学は私どもの宗門系の大学であります。仏教学科というのはありません。だから、仏教を専攻するような学生は一人もいないのです。しかし「仏教学」という必須科目がありまして、一回生と、三回生でその単位を取らないと卒業できません。この点では非常に厳しい大学なんです。私はそれだけでなくではないと信じております。

京都女子大学のその仏教学の講義においては、専門用語を用いて仏教学・真宗学専門の学生たち相手に話すよくなわけにはいかないことは当然です。仏教用語をできるだけ用いることなく、学生たちに釈尊の教え、親鸞聖人の教えを伝えていくのですが、これが私の人生の貴重な財産になりました。ただしこれは実は七転八倒す

るくらい難しいことなのです。仏教用語を使えばラクなのですが、それをできるだけ使わずに仏教の教えを説明する。そういう努力を、仏教学・真宗学の専門家たちは考えたことがあるんだろうかと思えます。

私たちの大学には京都女子大学付属小学校がありまして、その校長先生が女性の先生だった時に、私に「先生、うちの子どもたちに阿弥陀さまの話をしてあげて」とよく頼まれました。要するに、小学校一年、二年の子どもたちに法話をしろというんです。これは難しかったですね。小学校一年、二年の子どもたちも、明らかに十方衆生ですから阿弥陀さまの心を伝える努力をしなければならぬ。しかし、大学生を相手に、特に仏教学専攻の学生を相手に、あるいは法座に聴聞にくる耳の肥えたお同行たちを相手にするようにはいきません。

これは極めて難しかったのですが、私にとってこれほど勉強になったことはありません。仏教語を一つも用いずに仏教の心を伝える。こういう努力を仏教学者たちは一切考えないですね。独特の専門用語すなわち業界用語を使つてすましていくことが多いのです。そういう反省から、私はいつもこういうことばかり考えているわけです。

八

次は、4番目の「自然法爾」^{じねんほうに}です。ここからはちよつと専門的になります。「自然法爾」という思想は、講義をしたら何時間もかかるんですが、これは仏教用語・浄土真宗用語というよりは、もつと普遍的な思想用語だと思ひべきでしょう。しかも親鸞聖人の教えには絶対に欠かすことのできない生涯の結論である、と言つてもいいと思います。そして「自然法爾」と言えば、あらゆる議論が吹き飛んでしまうぐらい重要な概念なのです。われ

われの宗門の学問には「論題」というものがありまして、宗学上必要なトピックあるいは命題をいくつか挙げて、一〇〇論題、さらにその中でも大事な三〇論題とかいうような呼称がつけられています。つまり、教学についての命題を挙げるのですが、その、どれをとつても「自然法爾」は入っていないのです。これはおもしろいですね。なぜ、この親鸞聖人の明らかな特徴である「自然法爾」を入れないのか、という疑問は当然生まれてきます。

私の考えでは、これを論題として取り上げてしまうと、他のトピックに関する議論が成り立たないからだと思います。「自然法爾」は親鸞聖人の生涯の結論であつて、これを持ち出してきたら、信心がどうの、念仏がどうの、という問題は一切吹き飛んでしまうのです。この概念はそれほど深い、決定的な意味をもっているということです。「自然法爾」は、日本語で「そのまま」「このまま」という意味です。浄土真宗の阿弥陀さまと私の関係から言いますと、阿弥陀様から見たら「そのまま救う」、私の方から見たら「このまま救われる」ということです。これはいわば結論でしょう。

これを言つたらもう何も言う必要がない。念仏がどうの、信心がどうのとごちゃごちゃ言う必要がない。つまり他の議論が全部消し飛んでしまうくらいの内容をもっているからでしょう。

阿弥陀さまは、「このまま」の私を救い取ってください。念仏が出ないなら出ないままで、信心が喜べないなら喜べないままで、われわれは阿弥陀さまの御慈悲の中にあるということ、これが親鸞聖人の自然法爾思想の結論になりますが、それでは議論にならないので、過去の教学においては、敢えてトピックにしなかったのではないのでしょうか。

この自然法爾的発想は、何も親鸞聖人だけの特徴ではありません。先ほどから言っていますように、われわれ

日本人がずっと持ってきた精神性に現れているわけです。ご存じの方も多いと思いますが、金子みすゞさんの『土』。これはまさに自然法爾のうただというほかはありません。

土

こつつん こつつん ぶたれる土は

よいはたけになつて よい麦を生むよ。

朝からばんまで ふまれる土は

よいみちになつて 車を通すよ。

ぶたれぬ土は ふまれぬ土は

いらぬ土か

いえいえそれは 名のない草の

おやどをするよ

どうですか、すごいですね。金子みすゞさんは天才ともいうべき詩人ですね。耕されないから畑として麦を育てない土、道路になって車を通さないような土、つまり人間の役に立たないような土は、いらぬ土なのか。「いえいえそれは 名のない草の おやどをするよ」というのです。

これが「自然法爾」です。あらゆるものは、その存在の意味をもっているから、無駄なもの一つもない。するとこの私の人生も同じことだということになります。

次に、これはちよつと難しい表現ですが、道元禪師の『正法眼蔵』です。

而今の山水は 古仏の道現成なり。

（目の前にある、われわれが見ている山や川は、究極の悟りの現成である。）

ともに法位に住して、究尽の功德を成ぜり。

（悟りの位にあつて、無限の功德を出しつづけている。）

古仏いはく山是山、水是水、

（山は山、水は水だと古仏（道元）は言っている。）

この道取は 山是山といふにあらず、山是山といふなり。

（この意味は、山は山と言うわけじゃない。山は山なんだと。）

まさに禅問答というべきですね。「山是山といふにあらず」は、どういう意味でしょう。これは「あなたが言う山は山じゃない」と言っているんです。われわれ人間が、その分別で「山だ」と言っている山は山じゃない。あなたがそう言う前に、山はすでに山なんだということなのでしょう。「自然」とはこういうことです。人間の計らい以前に究極的なもの、すでにあるもの、それが「自然」です。

このような意味でわれわれ日本人は「自然」という言葉をずっと用いてきて、明治になって、その言葉を借りて西洋の、nature という概念の対訳語として「自然」という新しい言葉をつくり出したのです。現在のわれわれは、山や川、動物や植物などのような、人間以外の存在をひっくるめて「自然界」と言いますが、もともとそ

という発想は日本人にはなかったのです。現在の「自然しぜん」という言葉は「nature」という英語の対訳語です。これをつくったのは誰かわかりませんが（おそらく福沢諭吉だと思いますけど）、もともと「しぜん」という読み方もありませんでした。「じねん」としか読まなかったし、それは私のありよう、世界のありようを全部含めた上で、そのうねりのようなものを言うわけです。

九

親鸞聖人はこの「自然じねん」を阿弥陀さまの救いのはたらきに適用されたわけです。つまり親鸞聖人は「自然じねん」というこの概念をもって阿弥陀仏の他力を表されたのです。そしてこれが親鸞聖人の生涯の結論になりました。私どもの救いは、阿弥陀さまのはたらきにおいてすべて完結してしまっているのだということです。したがって、私の方から差し出すもの、加えるものはなにひとつ必要ではないということにほかならず、私の口からお念仏が出たら、それ以上のものはないということになります。

「自然じねん」は、もともとインド仏教の発想です。みなさん方はよくご存じだと思いますけど、「法性ほつじょう」はこの「自然」と同じ意味です。中国に仏教がもたらされた頃は老荘思想が非常に盛んでした。その老荘思想の中心用語が「自然じねん」だったのです。それで、仏教の核心を表す「無為むゐ」という言葉、これは人間の計らいを越えていくという意味ですが、この「無為」と「自然」とを同義語にして「無為自然」としてしまっただけでしょう。

しかしもともと「自然じねん」は老荘の用語で、仏教用語ではありません。たまたま老荘と仏教は非常に似た思想をもっていたので「自然」という言葉は抵抗なく仏教語としておさまってしまったのだと思われます。仏教に

においても老莊思想においても、究極的なありようを「無為自然」と言います。そして「私の悟りも無為自然の中で成立する」というのが親鸞聖人の生涯の結論です。この無為自然は阿弥陀さまのはたらきそのものに適用されますから、阿弥陀さまのはたらきそのものが、私たちの人生のいちばん大切なことを含んでしまっている、そしてすでに解決してしまっている、というのが親鸞聖人の自然法爾の思想です。

その「自然法爾」思想は私の生涯の研究テーマでありまして、理屈を言えばいくらでも広げることができませんが、簡単に言えば今言ったようなことになるでしょう。親鸞聖人の、念仏による救済思想、すなわち私どもの「救い・悟り」は、人間のあらゆる理屈を超えて「自然に」成立しているということです。それを阿弥陀さまに託しておっしゃっているのです。

こういう発想は西洋にはありません。この世界のこととはすべて神様のコントロールによって、神様の意志によって決まっていく。その神に、いかに自分が向かっていくかが西洋の宗教の信仰の大きな課題です。

親鸞聖人によれば、われわれの姿勢、努力を超えて、私の究極的なものは自然じねんに成立している。それが阿弥陀さまのはたらきであって、そのはたらきが私の口から念仏となって出てくる。私の口から念仏が出たら、それは阿弥陀さまの自然法爾のはたらきにつかまってしまうということである。だから、そこに私のつばをつける必要はない、というのが親鸞聖人の救いの論理の根底でしょう。

しかし、教学というものは、そのつばをつけるのが仕事であって、あつちからもこつちからも、いろいろつばをつけまくって、せっかくの南無阿弥陀仏という念仏を、手垢まみれの、つばまみれのものにしてしまうのです。われわれの口から出るお念仏、阿弥陀さまのはたらきのあらわれが「自然法爾」だということを、今日みなさん方にいちばんわかっていたいただきましたことです。それまでの話は全部前置きであります。

十

さて自然法爾を論じたいちばんいい例といえ、『莊子』の「応帝王編」で、そこには実に明快な譬えがあげられています。すなわち、

南海の帝を儼と為し

北海の帝を忽と為し

中央の帝を混沌と為す

儼と忽とときに相与に混沌の地に遇う

混沌これ待つこと甚だ善し

儼と忽と、混沌の徳に報いんことを謀りて曰く

人皆七竅有り

以て視聴食息す

此れ独り有ること無し

(南海の地に儼という帝王がいた)

(北海の地に忽という帝王がいた)

(また中央には混沌という帝王がいた)

(ある時、南の儼と北の忽とが中央の混沌の地でまみえ

たところ)

(混沌は彼らをあつく歓待した)

(儼と忽は、混沌が歓待してくれたので、その親切さに

報いたいと思つて相談した)

(人は誰でもその顔に七つの凹みがあつて)

(それによつて見たり聞いたりものを食べたり呼吸をし

たりしているのに)

(混沌だけはそうではなかった)

こころみに之を鑿^うたん

日に一竅^{けう}を鑿^うつ

七日にして混沌^{こんちん}死す

（そこでその顔に目鼻をつけてやろうじゃないか）

（と申し合わせて一日に一つずつ目鼻をつけていったら）

（七日で混沌は死んでしまった）

実にすごい譬えですね。儼と忽の親切心で、七日目にして、目が二つ、耳が二つ、鼻が一つ、口が一つ、整ったのに、それがおせっかいなことにすぎず、混沌は死んでしまったというのです。混沌はのっぺらぼうのままではよかつた、という痛烈な寓話です。

これは有名な寓話ですけど、浄土真宗の「救い」に関して、われわれは儼と忽と同じようなことばかりしてゐるんじゃないですか。余計なことばっかりして、大きなうねり、阿弥陀さまの大きなはたらきに、目が向いていない。逆にそれにつばを付けたら、穴を穿つたり、そんなことばっかりしているわけですが、それが阿弥陀さまの救いのはたらきそのものの価値を損ねてしまっているのではないか、殺してしまうのではないか、というのがこの寓話からくみ取るべき教えでしょう。

一般に、こういう発想をわれわれ現代の日本人は失ってしまいました。西洋にはもちろんこういう発想はありません。われわれはこういう発想をもって、自分の究極のよりどころとし、そして現代の世界に恩返しをしないといけない、というのが私が切実に感じるところであります。

私のお話のあとの方は走りすぎてわかりにくかったことと思いますけれども、お渡ししてある資料を読んでいただくときよくわかっていただけたらと思います。

ちょうど時間もきましたので、この辺で終わりましたでしょうか。

質疑応答

●フロアー1

今日は貴重なお話をどうもありがとうございました。せっかくの機会ですので、今日の内容にちょっと関係することでご質問させていただきたいと思います。私自身はアメリカに何年か住んでいまして、向こうで仏典翻訳に少し携わらせていただいていたんですが、その中で議論になったのが、ある言葉の翻訳でして、それが「信心」なんですね。「信」という言葉をどう訳すかが常にアメリカの学者と議論になるんですが、もしよろしければ、先生のご意見を伺えますと幸いです。よろしくお願いいたします。

●徳永

これはわれわれの翻訳を始めた最初の頃はこう訳していた。つまり *shinjin* という訳語です。うちの本願寺派の学者をみんな集めて、さんざん議論して、二十年かかったけど、結論が出なかった。それで、ずっとこの *shinjin* を使い続けてきたんです。ところが「信心」というのは浄土真宗の専売特許の用語じゃないでしょう？他の宗教もみんな使うじゃないですか。第一、これは「信心」をアルファベット表記しただけで翻訳にはなっていないのです。それでこれは決してよい訳語とは思えないというので、この *entrusting heart* に決めたくて *entrust* は、委ねるという意味だから、「委ねる心」という意味になります。それで今はすべてこういうふうに訳しています。

●フロアー1

faithとか beliefではないんですね。

●徳永

「信心」の訳語としては必ずそれが出るけど、faithはふつう「信仰」と日本語では訳しているし、beliefは「信念」という意味でしょう？「他力の信心」は信仰ですか？信念ですか？ぜんぜん違うでしょう。これは、私が固く神の救いを信じるという心、ひいては信念に近いものです。つまり自分の心に養い育てるものです。しかし、親鸞聖人の「信心」はそうじゃない。阿弥陀さまの御慈悲に「委ねた」すがたでしょう。だから entrusting heartつまり「委ねる心」と訳しているのです。